

南方（ニューギニア）

私の戦争体験と

捕虜生活・戦後

和歌山県 脇村 英一

八月や 六日九日 十五日

昭和十七年四月一日現役兵として、歩兵第六十一連隊補充隊に入営した私は、約二年間教育を受け、昭和十九年一月十一日南方要員として、夏服の支給を受けて歩兵第八連隊に転属した。第二軍野戦自動車廠（ニューギニア・マノクワリ）要員の編成で、召集兵（自動車運転手）を二十五名配属され、名古屋の小牧飛行場の廠舎で初年兵教育に携わった。

四月からは大阪の久保田鉄工所で鑄物の砂落し作業に従事した。四月二十七日、下関の宿に二泊、四月二十九日天長節（現みどりの日）の未明に「瑞穂丸」に乗船、門司港を出帆した。

八隻の輸送船団を護衛するのは航空母艦ただ一隻であるから、敵中を突破するのみであるとのこと、台湾を無事に過ぎると最も危険なバシー海峡である。

しかし、恐れていたことが三日目にきた。それは二等兵の病没である。乗船前から風邪気味であったが肺炎を引き起こしていたのである。第一の寄港地マニラまではあと三日はかかるから水葬にふさなければならぬ。しかし私としては班の初めての死者を遺骨も無く遺族に届けることは情において忍びない、もとより生還を期しないとはいいながら祖国を出て三日で病死

して、海に投げ込まれるとは、思いもよらなかつたに違いない。

その後、幾度か味わう「戦争」を、痛烈に思い知らされたのは、死者と生者の決定的な断絶の厳しき、紙一重の運命でしかない現実である。

私たち生還者は運が良かった。これが死者を葬るとき、私たちが何度も体験したいつわらざる感慨である。全部の死者をふくめて、彼らが決して大死にはなかつたことを、生き残りの私たちが立証しなければならぬ、という新たな責任である。そうでなければこの生者と死者の断絶は、あまりに不条理すぎる。とにかく私は班の最初の死者の遺骨だけでも遺族のもとに届けなければならぬという責任を感じた。直ちに「屍衛兵」をたててマニラで遺骨にすることに決めた。輸送船は、心配されたバシー海峡での敵潜水艦の魚雷攻撃も受けず無事マニラ港に到着した。直ちにマニラ市内の病院を駆け回り、ようやく火葬にしてくれる病院を見付けてほつとした。これには後日談があつて、昭和二十一年六月私が田辺文里港に上陸、復員して間

もなく、一人の婦人が幼児を連れて来宅され、田辺市内に大阪市から疎開してきているのだが夫の死亡の状況を聞かして欲しいとのこと、私は、この事実で初めて「事実は小説より奇なり」という言葉が現実性を帯びてきた。

婦人には、前述の状況を詳細に説明して水葬にはせず、本当に遺骨は本人のものであるから、よく供養していただくようお願いした。

マニラ兵站宿舎で船団編成待ちのため、一週間滞在し、マニラ港を出帆した船団はセブ島沖で魚雷攻撃を受け、僚船は中央部に魚雷が命中したので、瞬時に真っ二つに割れて沈没した。私の乗船にも魚雷の直撃を受けたのです。船首でドドンと大きな爆音とともに水が滝のように私が朝食をしている三番ハッチまで流れ込んできた。轟沈とはこんなに早いものかとびっくりしたが、直ぐ水が切れたので縄梯子で甲板に駆け上がりると、船首で勤務していた船舶兵が二、三人、そのシヨックで吹き飛ばされて三番ハッチの付近へ胴体や足がちぎれてバラバラと降ってきたのには、びっくり

したものでした。

そして慌てた兵隊たちは沈没すると思ったのか、積んである筏を海に降ろして、将校が命令して飛び込んでいるのでした。約五十人はいたでしょう。中にはタバコ好きがいて帽子に入れていたタバコとマッチで衣服吸っている兵隊もいました。まったく呑気な者です。幸いにも乗船は、船首と一番ハッチの間を突き抜けて爆発したので、直径二メートルぐらいの穴が空いただけで沈没はまぬがれた。五月二十四日ようやくやくにしてハルマヘラ島へヤホールにたどりつき上陸した。

空ドラム缶に薄板をしばりつけただけの浮棧橋の上をよるけながら進み、ぱっとしめつた砂浜に跳躍する透明で綺麗な波が渚の砂をなめている。砂浜を軍靴でくぼませ、第一步を印した大地の感触はすばらしいものだった。

七月三十日、ムナ島支廠要員として「グルワ」出発までの約二カ月間は、宿舍の建築（竹の柱に、竹で床を作り、ヤシの葉で屋根を葺くといった即席の兵舎のいくつかが、手早く出来上がった）、港での揚陸作業に

従事したが、激しい労働にひきかえ、食糧の給与は次第に悪くなっていった。

米は黴だらけの、鼠の小便くさいバサバサの外米に変わった。副食はさば、いわし、さけ、牛肉の缶詰のほか乾燥野菜で、調味料は粉味噌、粉醤油、塩などであったが、次第に分量を減らされていった。新鮮な野菜や果実は、ほとんど口にのぼらなかつた。

飲料水もひどいものだった。石灰質の隆起珊瑚礁からなっているので、濾過煮沸しても白濁していた。また転地して水が変わると必ず一週間は下痢をしていた。いわゆる硬水で、石鹼が泡立たなくて困つたものだ。下痢を治すにも衛生兵からクレオソート（征露丸）をもらって服用してもいっこうに治らない。消し炭が効くという民間療法をヤシの実で作って服用すると奇妙に治つた。

しかし平穩無事の日が当分続いた。その間に、ハルマヘラ島がどんな島か分かってきた。島の形態は、セレベス島（現スラウエシ島）を小型にしたような特異なK字型で、日本の四国とほぼ同じぐらいの大きさで

ある。全島密林に覆われ、山地は急傾斜が特徴である。五つの活火山は、いずれも一千メートル以上である。

人口は五万人と推定されているが、昔は流刑の島であり、完全に文明から取り残された島なのである。

初めてハルマヘラ島に敵機を見たのは、七月二十日であった。その後毎日のように一機か二機飛来したが、偵察が目的であったようだ。二十七日になると、ロッキード戦闘機が、三十機以上の編隊で押し寄せて来た。この大空襲によりこのままでは全滅すると部隊の約半数をムナ島要員として「グルワ」を出帆、セレベス島に転進した。

八月一日、途中無事にセレベス島「ビートン」港に到着直ちに上陸、兵站宿舎に滞在し連日揚陸作業に従事した。八月十七日再びビートン港を出帆、空襲をさけて夜陰に乗じて岸伝いに南下して、二十六日ようやく無事に「マカッサル」港に到着し上陸、直ちに陸路を北上してパレパレ東部の山地で自動車などの補給業務に従事した。

私たちも昭和二十年二月十五日、第二方面軍司令部

に転属となり、連合軍の反攻に備えて夜間斬込隊の演習を毎日のように繰り返したのである。激しい演習に引き換え、食糧の給与は次第に悪くなっていった。

米連合軍は、ボルネオに爆撃機の往復の際ピラを撒いて「セレベスの日本軍は自活する捕虜だ」と、セレベス島には上陸せず、いわゆる蛙飛び作戦で、ニューギニアからフィリピン・沖繩へと進攻した。

昭和二十年八月二十五日午前零時をもって、「勢作命第三百二十一号」により作戦任務を解除され、十一月十九日「勢命丙第六十九号」により「マリンプン」地区に集結を命ぜられ、抑留生活に入ったのである。

マリンプン俘虜収容所は南セレベスのマリンプン草原にあり、周辺に柵や鉄条網は張り巡らされていないが、周囲の望楼に自動小銃を持った歩哨を配置し、歩哨線を一歩でも突破すれば、その場で撃ち殺される仕組みになっている。労働は、道路や橋の修復、自給自足のための農耕作業であった。

南セレベス、マリンプンに収容された軍人、軍属、一般邦人は、約二万人であった。「死の草原」マリ

ブンは、第一次大戦中のジャワ移民及びドイツ軍俘虜が、自活出来ずにほとんど死に絶えたといういわくつきの「地の果て」なのだそうである。と先着の者に脅かされた。連合軍はこんな荒野に放り込んで「芋を作って自活せよ」といった。

私たちはまず宿舍の建設、井戸掘り、ジャングルの開墾、堆肥づくりと分担して作業に励んだ。直径二メートルの穴を掘り、堆肥を敷きつめて水もれを少なくし、日本種の大根、きゅうり、なす、かぼちゃなどを栽培した。井戸水の灌漑と堆肥の効果で天候に恵まれて、たちまち豊富な野菜が収穫された。

野菜が豊富になった一方では、激しい労働のため、体は肉類を要求するので、我れ勝ちに鼠、犬、猫を再び食べ始めた。巷間でよくビタミンBやC不足などといわれるが、贅沢なことで、本当に餓鬼地獄に落ちると、体が要求したといえばビタミンCが不足すると緑を見るだけで満足するものだ。

俘虜収容所の自給自足の生活もやがて二十一年五月末になると全員内地送還が決まり、パレパレのトラン

シットキャンプに移動を命ぜられた。私たちは、インド兵の運転するトラックに乗って収容所の門を出た。乗船地パレパレ港まで約二時間で到着した。それは、六月五日の朝のことであった。

六月九日、出港の復員船V006号は第六梯団にあたり、南セレベスの日本人はすべて引揚げを完了する。第六梯団には私たちのような兵器引き渡し等の残務整理者がほとんどで、受刑者も同乗したことは本当に痛ましかった。

午後五時、抜錨、出港の汽笛が鳴った。なぜか船内は静まりかえった。みんなでじつと汽笛に耳を傾け、ゆるやかに回転しはじめた船体をアツキにもたれて眺めながら、万感の思いに耐えているようだ。陸岸は動き、静かに遠ざかる「さよなら、さよなら」……心で叫ぶが声にはならなかった。私は生涯最大の喜びを、じつと一人かみしめていた。波静かなパレパレ港を出帆した復員船は、一路祖国日本への帰国の途についた。

それは昭和十九年四月二十九日、天長節の早朝、門司港を出帆して潜水艦の襲撃に怯えながらの往路の苦

難な船路と違い、復路は戦いに敗れたとはいえ安らかな船旅である。だがやはり祖国日本はどうなっているのか、我が家はと、違った不安は尽きない。

約一週間で船は潮岬南方に到着したが、それからは田辺文里港に入港するか、あるいは名古屋四日市港に入港するかを打合せしていた。このため約一週間船はエンジンを止めて漂流していたが、ようやく田辺文里港へ入港が決まり、船は紀伊水道を北上し、やがていつも夢に見た故郷田辺港湾の入り口である白浜番所の鼻を右に見て田辺港へ入港した。

眼前に迫ってくる山々は左から竜神、高雄、楨山で、啄木の歌

「ふるさとの山に向いて言うことなし、

ふるさとの山はありがたきかな」

が実感としてよみがえってきた。

田辺は戦災にあつてないと聞いたが、現実には緑したたる野山を見て、正に「国破れて山河あり、城春にして草木深し」である。死の草原、マリンプンでの抑留生活の自信と、ふるさとの野山の目にしみる緑は、私

に安心と活力を与えてくれた。

南セレベス最後の引揚船V6号は、六月二十日田辺港に入港最終船であり、二十三日上陸を開始した。検査を受けて復員手続が終わると、炊事で働いていた叔母さんが、御馳走を食べさせてあげるから泊まって帰りなさいと、親切に言ってくれるのを振り切つて帰宅した。

翌日復員列車で帰郷する戦友を駅まで見送り、国鉄(JR)の旧職場を訪れて復職の打合せをした。私は幸い怪我もなく、元気で生まれ故郷に無事帰つて来ましたが、私たちが経験した戦争体験は決して風化させることなく次代に語り継いでいかなければならないと思います。

昭和六十一年十月五日、田辺文里港海外引揚四十周年記念事業をすすめる会が大勢の御支援助と御協力を賜り、記念誌の出版、記念碑の建立、記念式典および記念講演会を盛大に開催いたしました。全国から集まられた多くの引揚者の方々と共に引き揚げた当時を思い起こし、平和への誓いを新たにしました。